

2008年8月11日

札幌市都心まちづくり推進室 様

芸術・文化フォーラム（ACF）

代表理事 原子 修

## （仮称）市民交流複合施設基本計画（素案）に対するACFからの提言

### 〔はじめに〕

わたしたちACF（芸術・文化フォーラム）は、かねてより、市民主導の創造性豊かな文化・芸術の花咲く札幌をねがって、市民・文化芸術関係者・行政・経済人の協働による活力あふれるまちづくりのあり方を、多くの方々の意見をもとに提言すべく努めてきた。

この度の、（仮称）市民交流複合施設の基本計画策定は、長期的・広域的にみれば、北の文化圏の中核都市としての世界的な役割を期待されている札幌の、これからの文化・芸術のあり方にとって、画期的な意義をもつものと思われる。

札幌の歴史はじまって以来ともいえるこの構想は、勿論、ハードの面とソフトの面とで共に有機的に検討していかなければならないが、とりあえず現段階における基本計画策定について、あくまでも市民・文化芸術関係者・行政・経済人のネットワーク化をはかるACFの立場から、以下

「市民交流複合施設の役割」

〔高機能ホール機能について〕

〔（仮称）アート・サポートセンターの設置検討について〕

〔（仮称）創造活動センターの設置検討について〕

〔総括〕

の五点から、提言をとりまとめ、北の創造都市をめざす札幌のこれからのあゆみの一助としたい。

### 「市民交流複合施設の役割」

基本計画（素案）では、市民交流複合施設の機能を、単なる旧市民会館の建替えとしてではなく、将来的に厚生年金会館の機能を受け継ぐことを念頭に置いて、以下のように規定している。

- 「世界都市さっぽろ、集客交流都市さっぽろにふさわしい文化芸術振興の拠点になることはもとより、様々な市民が集い、交流し、札幌の魅力を国内外に積極的に発信していく場」として位置付け、高機能ホールを持つ文化芸術振興の拠点としての役割を担っていく。

- 文化芸術活動の支援、次代の担い手の育成、文化芸術と異業種・異業界との協働・交流の推進などを通じて、札幌全体の文化芸術を支え、育てていく役割を担っていく。
- 創造都市さっぽろの理念を具現化する拠点として、芸術文化とIT、観光、ビジネスなど様々な分野の連携と活性化を図っていく。
- また、その具体化策として、「（仮称）アート・サポートセンターの設置検討」、「（仮称）創造活動センターの設置検討」を行う。

としていることは、「創造都市さっぽろ」を具体化するにふさわしい、将来を見据えた計画と考える。また、既存施設との役割分担のなかで文化芸術を支え育てることも表明しており、多様な要望に応え、施設の有効活用を推進する上でも重要である。

これらのことを評価するとともに、この「（仮称）市民交流複合施設」が、その位置付けとおり「創造都市さっぽろ」にふさわしい芸術・文化振興施策の拠点として、また、多くの市民が集う素晴らしい空間となることを強く願い、いくつかの疑問点の指摘と提言を行いたい。

### 〔高機能ホール機能について〕

- 高機能ホール機能の役割としては、以下の4点が位置付けられている。
  - ① 市民会館の代替機能（高度化された「鑑賞の場」の機能）。
  - ② 将来的に厚生年金会館の機能を受け継ぐ。
  - ③ ミュージカル、ショー、オペラ、バレエ、演劇など市民が期待する国内外の優れた現代舞台芸術の公演に支障なく対応するホール。
  - ④ 全市民が利用する施設であることから、日本舞踊、三曲、能などの伝統芸能も含めた様々なジャンルの舞台芸術の上演にも対応するような一定の多目的性にも配慮。

先ずこれらについて、いくつかの提言を行いたい。

- ホール機能については、戦前・戦後を通じ、日本においては多目的ホールが中心に整備されてきたが、「多目的は無目的」といった批判等を踏まえ、専門ホール化が進んだ時期があった。札幌市においても、「音楽専用ホール（Kitaraとして整備済み）」、「演劇専用ホール（未整備）」、「能楽堂（未整備）」の三専用ホールを整備する画があったと記憶しているが、今回の“一定の多目的性にも配慮した”高機能ホールの計画は、過去

の三専用ホール計画を踏まえたものなのか、それとも全く違うコンセプトに基づいているのか、その基本的な考え方を明らかにされたい。

- どのような考え方に立脚していたとしても、高機能ホールの役割として位置付けられている、上記①から④の全ての機能を一つのホールで充足することは不可能と考える。（基本計画（素案）7ページの1-1に書かれているように、他施設と役割分担したとしても、上記①から④の機能全て満たすことは、明らかに過大な設定と考える。）従って、基本計画（素案）の8ページから16ページに記載されている「高機能ホール」の計画は、①から④に示されている機能のうち、主にどの種類の舞台芸術での使用を前提として計画されているのか、種類別の使用見込みも含め、具体的に提示されたい。

また、そのように計画した根拠を、市民会館や厚生年金会館等での使用実績（単に「鑑賞の場」と「発表の場」に大別するだけでなく）や、市民意向なども含め、具体的に提示されたい。

- 以上を踏まえた上で、現在計画されている高機能ホールの経営計画はどのようなになっているのか、今回の投資は何年後に回収されるのか、或いは、されなくても十分な投資効果を生み出すのか、それらの見込みについて出来るだけ具体的に提示されたい。
- 以上の3点は、言い換えると、「何のために使うホールなのか?」、「それは市民意向と合っているのか?」、「経営に問題はないのか?」という3つの課題に集約される。（三専用ホール建設計画との整合性を除く）

この計画は膨大な予算を要する事業と考えられるので、この3つの課題の一つでも「根拠が曖昧」であったり、「詳細の検討は今後」ということであれば、理念としての「（仮称）市民交流複合施設基本計画（素案）」に賛同できたとしても、「事業そのものをスタートすることに賛同することは出来ない。」というのが大多数の市民意見と考える。従って、高機能ホールの役割について、以上の課題等を踏まえ、より具体的に明示した上で、改めて市民意見を問うべきと考える。

#### 〔（仮称）アート・サポートセンターの設置検討について〕

- アート・サポートセンターの役割は、「市内文化芸術施設等の役割分担に配慮しつつ、札幌の文化芸術全体に目配りし、これを支えていく役割を担うもの。」とし、「以下のような機能が想定される。」としている。

- ① 札幌の芸術文化施策に対する提言。
- ② 様々な文化芸術活動のコーディネート・支援。
- ③ 人材育成・普及教育。
- ④ 情報提供・場の提供。

基本的に、この方向性は大きく評価するものであるが、「（仮称）市民交流複合施設」の計画と関連して、いくつかの提言を行いたい。

- 文化芸術施設と言った場合、一般的には、Kitara、教育文化会館、厚生年金会館、「市民交流施設」、「代替施設」などの所謂ホール機能を持つ施設に加えて、美術館、演劇劇場、博物館、ギャラリー、フリースペースなどが思い浮かぶが、「札幌の文化芸術全体に目配りし、これを支え育てる。」とした場合、その活動を支え育てている施設は、映画館、工場・倉庫、オフィスビル等、実に様々である。

具体的には、市役所、区役所、市中のビルなどの施設群や道路、公園、広場、地下街、地下鉄コンコース（「アート・ステージ」で活用）は勿論、工事現場の仮囲いや道路や鉄道の橋脚下でさえも「文化芸術の場」、即ち“創造活動の場”として機能させることが可能である。

更に、所謂「メディア・アート」といった領域も含めて考えると、具体的な“場”に捉われることなく、バーチャルな空間での展開も可能となる。

このような観点から考えると、「札幌にある、あらゆる都市機能が有機的に連携することにより、札幌そのものが“劇場空間（芸術文化活動の場）”として様々なドラマ（芸術文化）を生み出し、世界に発信していく。」ことは十分可能であり、寧ろそのような方向性を検討すべきと考える。（既に、10年以上も前に「劇場都市」という概念が提示されているが、札幌発の新たな概念として発信することが重要である。）

従って、「札幌の文化芸術全体に目配りし、これを支え育てるアート・サポートセンター」の機能を考えていくのであれば、“芸術文化活動＝あらゆる空間で行われているあらゆる創造活動”と再度定義をし直した上で、改めて、より具体的な検討を行うべき、と考える。

- “芸術文化活動＝あらゆる空間で行われているあらゆる創造活動”と再定義した場合、更に、大きく二つの視点からの検討が必要と考える。

その一つは、芸術文化活動のサポーター組織である。彼ら一人一人の活動そのものを創造活動と呼ぶことは出来ないかもしれない。しかしながら、彼らの活動なくして札幌の芸術文化活動は成立し得ない。その意味において、彼らの活動は“貴重な価値を創造している活動”ということが可能

である。従って、アート・サポートセンターの機能を検討する場合、少なくともこのような市民活動のサポートまで含めた検討が必要と考える。

⇒ 芸術文化と市民連携の視点。

- なお、この観点から考えると、芸術文化活動のサポーターに限らず、町内会やNPO、NGOなど、あらゆる市民グループが“創造活動”の担い手となっており、これらの“市民活動”なくしては、本来の意味における「創造都市さっぽろ」を語ることは出来ないものと考え。アート・サポートセンターの機能論からは逸脱するかもしれないが、敢えて、この点については提言に加えておきたい。

- もう一方の視点は、IT、観光、ビジネスとの連携である。この機能は、「（仮称）創造活動センター」の役割として位置付けられているが、採算性や費用対効果の観点も含めて芸術文化活動を展開していこうとした場合、この機能を欠くことは出来ない。過去の「芸術文化施策」の失敗の大半は、途中で資金が続かなくなることに起因しており、「劇団四季」などビジネスモデルを構築し得た例は数少ない。

「札幌の文化芸術全体に目配りし、これを支え育てていく」という、本来の目的を達成するためには、この視点からの検討は不可欠である。

⇒ 芸術文化と産学連携の視点。

- なお、札幌市では平成23年度に「札幌駅前通地下歩行空間」が供用開始され、札幌駅と大通の地下空間が一体となった巨大な地下空間が創出される。この空間では、先進的な映像装置や広場、ステージ等の設置も検討されていると聞いており、商業的な利用に加えて、芸術文化活動の場として、更には、先進的な映像機器を用いた「メディア・アート」空間としての活用も期待される。従って、IT、観光、ビジネスとの連携を図っていくためのモデル事業を実施するには最適な場所と考えられることから、是非、新たな芸術文化活動の拠点として、「札幌駅前通地下歩行空間」の活用検討を早期に始めるよう、敢えてこの点についても提言する。

### 〔（仮称）創造活動センターの設置検討について〕

- 創造活動センターの役割は、「創世交流拠点の理念に相応しい様々な市民の交流を促すとともに「創造都市さっぽろ」の理念を具現化し、新しい札幌の魅力を発信する場」としつつも、「施設構成として芸術文化、IT、観光、ビジネスなど各分野の機能を複合化することにより、それぞれの持つ潜在的な力を引き出し、その交流により、新たな付加価値を生み出すことを想定している。」と

施設整備を前提とした複合・交流イメージしか記載されていない。その上で、以下の事柄が例示されている。

- ① ITを取り入れたアーカイブ機能やライブラリー機能。
- ② それらの情報へのアクセスを支援し、アドバイスするリファレンス機能。
- ③ アート、デザイン力、商業などの協働による各分野の活性化。
- ④ 鑑賞前後の利用客の市内観光への誘導。

以上について、いくつかの提言を行いたい。

- そもそも、1～2街区に複合的に整備、或いは誘導されるであろう施設（代替施設の将来活用含む）だけでの交流によって、「創造都市さっぽろ」の理念を具現化することが可能なのか、非常に疑問である。

既に、アート・サポートセンターの役割の部分で、創造活動センター機能との連携の必要性については指摘したところであるが、創造活動センターの担うべき機能は非常に重要と認識している。従って、両センター共、市民交流複合施設の付帯機能として議論されるのではなく、根本的にその機能論を検討すべき、と考える。

- また、先程も指摘したように、平成23年度には「札幌駅前通地下歩行空間」が供用開始され、札幌駅と大通の地下空間が一体となった巨大な地下空間が創出される。また、それに合わせて北3条通に「広場空間」、更には「創成川通」といったビッグプロジェクトが次々に完成していく。

このように、札幌のまちは、今まさに大きく変容しようとしており、それに合わせて、「創造活動センター」および「アート・サポートセンター」の機能も変化していくことが求められるはずである。

従って、既に基本計画（素案）に示された、「アート・サポートセンター」の機能に「創造活動センター」の概念を加えた、「（仮称）アート・センター」という新たな“上位概念”を構築し、札幌の文化芸術全体に目配りし、これを支え育てていく具体的な施策について、早急に検討する必要があるものと考えます。

- その上で、
  - ・ ITを取り入れたアーカイブ機能やライブラリー機能。
  - ・ それらの情報へのアクセスを支援し、アドバイスするリファレンス機能。
  - ・ アート、デザイン力、商業などの協働による各分野の活性化。などの「創造都市さっぽろ」を具体化する各種機能について、全市的な取り組みとして検討すべき、と考える。

## 〔総括〕

- これまで、（仮称）市民交流複合施設基本計画（素案）に沿って、いくつかの提言を行ってきたが、総括的な意味で、重複する内容も含め、改めて提言として整理しておきたい。
- 「札幌の文化芸術全体に目配りする」視線と、「市民交流複合施設の文化芸術全体に目配りする」視線は明らかに異なる。何故なら、市民交流複合施設は高機能ホールを中核とする施設であり、そこにおける「文化芸術全体への目配り」とは高機能ホールの運営を主体とした視線とならざるを得ないと考えるからである。

従って、「札幌の文化芸術全体を目配りする視線」を論ずるのであれば、一つの施設に捉われることなく、「上位概念」として検討を行うべきである。

この場合、既に述べたとおり、（仮称）アート・サポートセンターと（仮称）創造活動センター、両センターの概念を併せ持った「（仮称）アート・センター」という新たな上位概念を構築し、札幌の文化芸術全体に目配りし、これを支え育てていく機能として検討していくべきと考える。

（仮称）市民複合交流施設基本計画（素案）を進める上で第一の課題は、「上位概念」即ち「芸術文化振興施策」の欠如であり、このことを先行して検討し、少なくとも札幌駅前通地下歩行空間が供用開始される前までに、検討を終える必要があると考える。
- 一方、（仮称）市民交流複合施設の検討に関して言うと、ソフトの計画が熟成されて初めて、ハードの詳細な検討を行うことが可能となる。他方、予算や敷地の規模など、ハードの制約条件を全く無視してソフト計画を立案することは無意味である。従って、その検討順位を誤らずに進める必要があるが、現状のように、再開発を見定めた施設整備計画と、芸術文化振興施策、そして施設運営・経営に直結する複合・交流施策とがバラバラに議論されていることは、極めて憂慮すべき事態と考える。また、将来的に厚生年金会館の機能を引き継ぐとすれば、エンターティメント系の要望に対応した施設でなければならない。

従って、現在の（仮称）市民交流複合施設基本計画（素案）を、ハード的な制約条件の叩き台が策定された程度と認識し、「上位概念＝芸術文化振興施策」を策定の上、施設整備というハード計画と、芸術文化振興＋施設運営というソフト施策を一体的に検討されたい。
- もとより、今後整備される公共的施設は、産学官民一体となって運営されるべきであり、そのためには、十分に経営計画を立案し、ビジネスモデル

を確立した上で着手すべきである。

この観点に立ち返って考えると、既に述べたとおり「高機能ホール」の在り方自体も再考の必要性があると考ええる。

(仮称)市民交流複合施設の計画は、市民会館の代替機能、厚生年金会館の老朽化等に端を発し、北1西1の再開発計画へと発展してきたものと思料するが、どこかで市民意向の取り違いをしてはいないか？考え方の優先順位を間違えてはいないか？

市民会館や厚生年金会館の代替機能は、もっとシンプルに必要な範囲で高機能化することを議論すべきであり、また、産業界を巻き込んだ将来を見込める新たなビジネスモデルを構築すべきであり、さらに、全ての段階において、しっかりと市民と一体となった取組みを行うべきである。

そのことによって、札幌独自の、他都市には無い、新たな市民発想に立った「創造都市さっぽろ」を実現し得るものと考ええる。

○ 最後に「(仮称)アート・サポートセンター」について。

その考え方が、20ページの(資料)に第4章として示されているが、ここに書かれている総合プロデューサー、統括プロデューサー、統括コーディネーター等の概念は、一般的に舞台芸術で使用されている定義と異なっているものと感じられる。また、ディレクターという概念が含まれていない点にも違和感を覚える。

既に述べたとおり、「札幌の文化芸術全体に目配りする」視線と、「市民交流複合施設の文化芸術全体に目配りする」視線は明らかに異なることから、札幌市の芸術文化全体目配りするプロデューサーと市民交流複合施設の文化芸術全体に目配りするプロデューサーの役割に違いがあって当然である。目配りしている施設の大きさや施策の規模、或いは演目によっては、ディレクターとプロデューサーを兼ねることも可能なのかもしれない。

いずれにしても、目配りしている施設の大きさや施策の規模によって、その機能や組織形態は大きく変わるということを認識した上で、先行して前述の「(仮称)アート・センター」という上位概念、さらに(仮称)市民交流複合施設の検討を進めていただきたい。

本件のお問い合わせ先 011-241-9520 上野

E-mail [nishikawa@bccom.jp](mailto:nishikawa@bccom.jp)

ACF事務局 〒065-0012 札幌市東区北12条東1丁目4-23

21世紀ビル (有)BCコム内

代表理事 原子 修 090-2810-0661

事務局長 西川吉武 090-3399-1083